

くものであり、記録の中から十分窺い知ることができません。卒寿を過ぎ、なお豊饒かきくとして丹精こめた野菜栽培と、ゲートボール同好会の練習や大会に欠かさず参加する、その体力と精神力には心から敬意を表するところです。

満州開拓の先駆者、第一次武装移民の勇者も年ごとにこの世を去り、歴史の生証人も数少なくなり、誠に心寂しい思いであります。荒木氏はその中であって、満州独立守備隊、奉天北大宮分校、弥栄村開拓団、そして終戦逃避行と激動の歴史を体験された方であり、後世に語り継ぐものとしてこの一編を記録されたのであります。

満州から引揚げ後、再び開拓に夢をかけ現在の地に弥栄村の同志と共に入植し、語り合い励ましあって今日の弥栄部落の基礎を築かれた「拓魂」即ち弥栄魂には、今更ながら「明治の男たち」という言葉があてはまる感じます。入植後「弥栄開拓農業協同組合」設立と同時に役員に就任され、爾來長年にわたり組合及び部落の運営と発展に貢献された功績は、誠に大なるも

のであります。

最後に一言、残念なことに、平成八年七月四日妻みえさんが死去されました。引揚げのときの残酷なる労苦が災いし、長年にわたる後遺症に苦しめられておられたと聞きました。行年八十三歳の生涯でございました。

一言申し添え謹んで哀悼の意を表します。

(弥栄会副会長北海道支部

支部長 小野塚 芳二)

私は終戦にこう対処した

岩手県 堀 忠雄

昭和二十年八月十六日、満州北安省通北県副県長本田正晴氏より私だけ特別電話召集を受けて、「日本帝國無条件降伏」のことを知らされた。県公署では、そのとき日系、満系官吏の合同離散会を開いていました。副県長に案内されてその離散会に出席したら、井上開

拓科長は大声で「来い、来い」と叫ぶ。満系の人たちは全く黙りこくっていました。私は酒には弱いのですが、飲んで酔っ払ってしまい千鳥足で帰団した。六キロの道を途中何回も草の上に腰をおろして考えた。

百四十七人の団員が応召するとき、必ず団長室にあいさつにきて「いよいよ私も行きます。家族のこと、くれぐれも頼みます」という一言の人が多かった。私は「任せておけ、死ぬなよ……」を何十回も言い続けた。

六キロの道をふらふら歩いて、ようやく決心がついた。七百人近い婦女子を守らなければ。応召される人には必ず言った「任せておけ」という言葉は、男の言葉だったのか……。私の責任は一体何であったのか。理由はいろいろあるが、とにかく五福堂開拓団本部に午後四時過ぎに帰団した。

私は本部に残っている団員に「本部にいる人々、幹部家族も全員すぐこい」と言明して待っていた。

「何事だろう、団長が酔うなんて珍しい」と言う人々……。

団長室で全員に向かって「日本は敗れた……昨日の正

午のラジオ放送だと、本田副団長に言われて、今帰団した」と言うと、興奮した校長が大声で「団長さん、それで、どうするんですか？」私は「待て、待てあわてるな、間違うとだめだから、言うから校長、その黒板に書け」「どう書きますか？」私は大声で、「断固生キ抜クベシ」校長は「断固死ぬべし」と書いたから、大声で「バカヤロー」とどなりつけて黒板の字を消し、「生キルベシ」と片仮名で直した。

私は直ちに命じた。

「小山さん（酪農会社出張員）は、吉原さんの馬に乗って遠い部落、四部落に走ってくれ。岩田坊さんは、北の三部落を頼む。校長は老年組の多い高柳と小国に行ってくれ、私は村山君と西蒲と妙高に行く！」

長栄部落の有力者、綱島信平だけが招集にこなくて、奥さんが小山さんに話を聞いて帰宅しそのまま伝えたという。綱島は、「そんなバカな！流言だ！何を言うか！」と奥さんをピンタでなぐったという。最南端二十戸部落は男が二人しかいないから、翌日部落を捨て、男（老人）の多い部落に集結した。

八月十九日午前二時、本田副隊長は満軍隊長の命令を、「堀団長に伝えてこい」と言うので、満軍騎馬三人に守られて、五福堂本部にやってきた。豪雨の夜であった。

「満軍隊長の命令だ。八月十九日まで、五福堂の武器、刀剣などすべて持参せよ。もしこの命令を守らないと、満軍は五福堂の『殲滅作戦』を強行する」という命令を言葉で伝えて去った。

私は八月十九日早朝、残っていた男子全員を本部に集めた。男たちは集まってきた。家族の男子も合わせて総勢四十人ぐらい。「正午まで武器を全部持参せよ。庶務の大原君は武器台帳と照合して、絶対部落で隠すことのないように、調べろ」一人が、「団長さん」私は「何？今、団長職を辞任したばかりだぞ。今は君らと同格だ：」「団長さん、一体私どもをどうして守ってくれるのですか」「守るなんてことは、もうできない情勢だ。無手勝流など無い：とにかく殺されるな。それだけだ」みんなは黙ってしまった。私は、もともと理屈屋で通ってきたのだから、それ以上の団員の言

葉はなかった。それで私は付け加えた。「あのネ、日本人が満人に勝てるのはたった一つあるぞ。それはバカ正直だけだ」団員たちは安心したように、また疑いを深くしたように：解散した。

「十九日の正午まで武器を持参せよ」の命令だったが、全く正午には何事もなかった。台帳には機関銃一挺、弾丸四千発、追撃砲一門、弾丸四十発、小銃二百挺、弾丸四千発、手榴弾四十発、拳銃三挺、弾丸百二十発、個人の猟銃は不明、刀剣数も不明。

午後八時、三個部落分は未到着だが出発することにした。私が毛筆で降伏文書を書いていたら、小山さんがきて「団長さん、これは本気ですか」と問うた。

「小山さん、満人社会はネ、字を知っている人に紙に契約書を書いてもらい、契約人二人、立会人一人、書記一人それぞれ氏名を記して印鑑を押す文書を作ると、彼らは絶対に守り信ずるといふ社会常識なんだ。私は満人との交際も深いし、また満人社会とは長らく交際してきた。ご承知の通り私の支那語は北京語であるほか、満人農学校の校長を二年もやり、生徒が敬語で私

に話す言葉を私も身につけている。したがって今、日本人が生きてゆくには、正直で素直に、前のように遠慮のない語り方や行動を慎むことだよ」小山さんは大声で「分かった。私を武器輸送班長に命じてください」「よろしい。私は責任者として満軍隊長にこれを手渡しするんだ」と。

午後八時に大車四台で出発した。途中、洪水で橋が落ちていた。小山隊長は馬上で、深みのない場所を探して渡河の指示をしていたが、高橋と磯部は勝手に渡河して、とうとう動けなくなった。やむを得ず全員で武器を肩にして何回も渡河し、馬を荷車から外して渡河し、荷車だけ引き出し、再び組み合わせて出発、県城の東門に着いたのはもう午後十二時近くになってしまった。

小山隊長は東門から騎馬で走り、元県公署の満軍本部に駆けこんだ。大声で「武器返納にきた」とどなる声がかすかに東門まで聞こえた。

十分ほどして、一個小隊の満軍武装兵が東門にきて、日本人一人に二人の兵が、弾丸をつめた銃を突き付け、

一列縦隊になって県公署に向かった。馬と大車そして武器、すべて倉庫に納めてから、団長の私と台帳持参の大原とが隊長の前に出て、私は降伏文書大声（日本語）で読み、隊長に手渡した。それが終わると満軍一個小隊が、私と大原の立っている後に一列で行進してきて、「ガチャガチャ」と銃に弾つめをした。それから隊長は今度は日本語で「五福堂は正直で、命令を守ったから今日は殺さない」と言った。

私と大原が残されたから、小山隊長は団員六人と草原に伏せをして待っていた。「どうして東門まで行かなかったのか」「団長さんが殺されるなら、私どもは肉弾をやるぞと待っていたんです」「ありがたい、もう今から丸腰だ」月は皓々と照っており、大陸の荒原は音もなく更けていった。

本部にたどり着いたのは八月二十日午前二時であった。本部では妻たちが、銀飯のおにぎりを作って待っていてくれた。

八月二十日、五福堂地区は晴れあがって明けた。望楼に測量用の望遠鏡をつけて人の通るのを監視してい

だが、全く人通りのない静けさだった。

へ国敗れて山河あり

城春にして草木深し…か？

そうだ、芭蕉は「夏草や つわものどもの 夢のあ

と」と句を読んだ。

へ天上影はかわらねど

栄枯は移る 世のすがた

うつさんとてか 今もなお

嗚呼荒城の夜半の月…

私は独りになって心の奥で思い続けた。

八月二十一日夜、小雨。私は笠をかぶって高い望楼に掲げた日章旗をはずし、小野指導員（内地に帰り死亡）が形見に残した都山流の尺八をもって望楼に登り、追分節の前唄から思いっ切り吹き流した。

尺八の音を耳にして、保健婦さんが望楼の下にきて泣いていた。医者の渡辺先生も尺八を持ち出して家の前に立っていた。

八月二十二日、数人の満人が棍棒を手にして本土土壁の外にきた。私は丁寧な満語で「よくきたネ」と話

をした。そうしたら、親指を立てる姿勢になって私に言った。

「…老百姓説呀…五福堂团长…奸人呀」それには私は答えなかったが、私は支那人の格言を知っているから、眼をおだやかにして一言だけ「謝々」と応じた。

支那の格言「不好人当兵、奸人不当兵」（直訳 悪い人は兵になる、よい人は兵などならない）この兵というのは、人間の兵という意味と武器という意味とが複合していて、五福堂は全武器を満軍に納めた、その第一号だという見解だということは、私はすぐ理解できた。そして八月二十二日の夜から、各部落は強盗団に襲われたが、団では全く無抵抗で、婦人たちは子供を連れて逃げ、畑の中に隠れた。本部から北四キロの部落は、全員裏の玉蜀黍畑に子供を抱いて隠れ、朝を迎えた。清野トシエは男の子二人、明けて朝、みんな北のホイル河の激流に身投げしようとする主唱し、モンペの紐をつないで早く早くと叫んでいた。

神主をやっていた品田は「おい青山、本部に行って見てこいよ」青山は道路から東の草原に出て本部に向

かった。途中満人に会ってしまった。満人は青山をつかまえて言う。「団長ハ死ンダゾ」青山君が本部にきて、私の顔を上げしげと眺めていた。「青山君、どうしたのか？」何も言わずに私の顔を見ているばかり。「早く部落に帰って本部にすぐ集結せよ」と私は言った。

満人たちの襲撃とは：本当に戦時の日本人による統制がひどかったから、衣類の欠乏が甚だしく、また反満抗日分子は、日本人ばかりに綿布の配給がされているからだとの逆宣伝が、戦時中から裏工作されており、一般満人大衆は「この目をねらっていた」のであることが後日分かった。

五福堂地区内で、私どもと一緒に生活してきた十戸足らずの満人たちは、私が家畜を全く無償で贈与していたから、匪賊には組しなかったようだった。五福堂の武器返納を、最後までぐずっていた平林部落の老人は、明けて八月二十日、どこかの満人に射殺された。それでびっくりして、全員本部に集結してきた。

同じく分村計画の先発隊、高柳部落は暴民に抵抗し

ていたから、暴民たちも「火の矢」を打ち込んで草薙屋根に火をつけた。それで本部・学校校舎に集結してきた。

長栄部落の綱島信平も敗戦を認めたが、本部集結を拒否し、二十戸の共同生活を持続していた。そしてオンドル構築祝をして、合宿を始めた九月十七日十時ごろ、匪賊に夜襲された。窓から発砲されて早川の女の子が即死した。そして全員地べたに座らせられた。匪族隊長は「綱島来々カシラカシラ」と一声、綱島信平、立ち上がる銃で一発、「ボカン」声も出さずに即死した。

私どもは本部の望楼から眺めていた。チラチラと灯火だけが見えた。小山が言った。「団長さん、行ってみようか？」それは止める。必ず逃げてくるから」そして九月二十日朝、生き残りが本部に集結してきたが、もう宿舎にできるのは加工場しかなかった。長栄の人たちは、自分らの部落の約一カ月の生活で、まず子供らの健康が悪化していた。本部に集結してきたから、ほとんど子供供らが死んだ。

長栄のこの事件の前のこと、長栄には男子が四人未

召集しており、ある日滝沢、中村両君が私のところに来て言う。「団長さん、手榴弾をください……」「何？手榴弾を団本部で隠し持っていると思うのか？一言でもそんなことを言えば、五福堂はまだ武器を隠していると満人に吹聴されるぞ」

その翌日、綱島が私のところへ汚い麻袋を持ってやってきた。「滝沢君らが全員で自決しようかと決議したから、私はこうして汚い姿でみんなのところに出かけて行ったよ。私はこう言った。『皆さん一緒に自決なさるそうですが、全員残らず死なれては、あとには線香もローソクも立ててくれる人がいなくなるから、これこれ、わしが持ってきたよ』男子四人が二人ずつ、自決組に分かれていた」と綱島は私に語って帰って行った。幸い自決はまぬがれたが、九月十七日の被害は大きかった。即死二人、負傷者三人、加工場に集結したあと、病人が多く出て、また死亡した。

諦めて、昭和二十一年三月末、私にかくれて早朝北安市街四十キロの道を歩いて脱出して行った。北安では生活環境は悪く大人は全員発疹チフスにかかり、子

供らも多く死亡した。

内地の分村計画の先発隊として入植していた岩船の平林出身の人々も、家族が多いから働く人も多い、従ってよい生活ができるだろうと予想して北安に脱出して行ったが、この部落の大人たちは皆発疹チフスにかかり、男子三人死亡、婦人と子供たち（少年少女）だけ生還はしたものの、渡満するとき、既に家屋敷は売却して入植したのだから、母村では受け入れが困難であり、なかなか幸せは巡ってこなかった。

前後の満州は、中共と国民党の対立が始まった。ソ連が北安に入城したのは、昭和二十年八月二十日、黒河に侵入したのは、八月九日で、わずか三百キロの黒線を守備しながら南下が遅く十五日もかかった。そして通北県にソ連軍がきたのは八月二十三日であった。八月二十五日、小野マツさんが望楼での監視役をやっていた叫んだ。「あれ、あれ、真っ黒になって大量の満人がくるよ」五福堂では竹槍の訓練を婦人たちにやらせていた。私は大声で叫んだ。「角山、みんな槍を草むらに隠して加工場のあたりまで集まれ……」

私は代表して大群に両手をあげて静かに前進した。ソ連軍は横に散開して、ひざ撃ちの構えに入った。それでも私はかまわず前進した。「堀団長、不<sup>フ</sup>怕<sup>バ</sup> 来<sup>ライ</sup>来<sup>ライ</sup>」と叫んだその人は、何と私の知人、黄<sup>ホウ</sup>さんだった。私は無事黄さんの通訳で、ソ連軍司令官（大佐）ほか将校だけ本部庁舎に案内し、ソ連兵は本部土壁にマンドリン銃で守備についた。本部には私の妻だけ入れて、紅茶を出させた。だれも飲まなかった。私は中国語で黄さんに通訳してもらった。「五福堂には男性が四十人だけで兵士は一人もいません。また武器は八月十九日満軍にすべて渡し、全く団には武器はありません。そして婦人、子供だけで約七百四十人います。この人たちが自力で越冬し生き続けていくには、この私どもが作った畑で自立していくしかありません。どうか、ここにとどまって生活を続けることをソ連軍は許可してください」と話した。黄さんがどんな通訳をしたか、私には分からなかったが、しばらくして「許す」という一言だけで、施設を見て歩かれた。電話交換室を見て「これは全部県に出せ」という命令だけで、加工場

の味噌、醤油などは「出せ」という命令はなかった。八月二十六日朝鮮人の青年が使いにきた。私は直ちに通北県城に出かけた。元県公署の日系人があぐらをかいて並んでいた。井上開拓科長は「堀<sup>ウラウライ</sup>さんも来<sup>ライ</sup>来<sup>ライ</sup>！」と大声で叫んだ。私は案内されてソ連軍司令官室に入られた。昨日、私が面会したソ連軍司令官は、私に腕章を渡された。それには「日本人宣撫班長」と記されている、大きい判が押されていた。

私は今日からどこを歩いても安全だ、ということになり、早速、奥地の開拓団に武器返納の勧告に回り始めた。各団も全く抵抗せずに続々と県に輸送してきた。県北の各団はこうして武装解除が完成した。ただし、川の北側から東火犁に集結していた小柳義勇隊は、私に訴えた。「小柳は東火犁に集結するとき、義勇隊に配分されていた小銃と弾丸は、全部川に捨ててきたからどうしたらよいか」という質問だった。それで小柳の団長を連れて県城の警察署に行き、その事情をそのまま伝えて、川から銃器の引揚げを監視してもらい、全部回収に成功した。



正直は今の日本人、特に武器を持っている団体にとって、必要なことであり、本気で武装解除に応じ、従順な態度をとることが生きられる第一歩であった。この情報は県南開拓団にも知らされていたらしい。県南開拓団の代表が騎馬で山の中をどう歩いてやってきたのか不明だったが、午後早く五福堂までやってきた。

九道溝（群馬）掛川団長、天立公司（千葉）平井団長・趙木匠（埼玉）山本団長・義勇隊（山形）鹿野団長に言った。「皆さん方のお話を聞いてみると、ほとんど武勇伝ばかりだ。私は反対です」掛川団長は「堀団長の対策を教えてよ」と言うので、「何も対策なんてありませんが、私が団員たちに言っていることは、まず『殺されるな』それには、満人よりはるかに人格的な行動は、なんでも『バカ正直』だということですよ」「バカ正直か……」と。

終戦後の通北県の実情は、ソ連軍支配により新県長孫亜民が赴任された。私と曙義勇隊経理指導員と挨拶の面会をお願いしたら実現した。孫亜民県長は、元反満抗日軍北安隊長で、普段は克東県に家畜商人として

開業していたという。経理指導員木俣慶一郎と最後の取引き支払いは、終戦直前であったため友人扱いにされた。

孫亜民新県長の召集された各団の幹部への言明を、孫亜民に指名されて私が通訳をした。その後は厚い交際をいただき、居留民会長に任命され、また事務所開設の世話になった。

孫亜民県長の援助は左の如し。

(イ)豪雨で流出した橋の修理を命ぜられたから、五福堂の男子を動員して山林より用材を人力で運び出し（約十キロの距離）橋を完成させた。そのためにソ連軍が残っていた古い粟（原穀）を食料として五福堂にいただいた。

(ロ)ソ連軍の婦人要求がひどくなったから、孫亜民県長にハルビンから商売人を買ってくるからと申し上げ、代金を現金で六千円をもらい三人を派遣したが不能……そのまま謝ったら許された。

(ハ)居留民会には連日、満人たちが来室されて談笑、そして「応召家族を妻にしたいから、あっせんしろ」

と申し出ばかり。満人には、日本人の応召ということはどうしても理解されない。彼らは当兵（ダンピン）武器を持つての団体加入だ。妻子とは関係がうすくなったと理解していたようだった。これをうまくだまして断るのは、支那語のできる私の任務にされたようであったが、とにかく拒否した。兄貴扱いにすると彼らは紳士になった。これは二十年十一月ごろ、方正県の実情が満人たちによく伝えられていたからだった。

(二)十二月になってから、元通北県満系県公署の人々が、中共より派遣された将官を通北駅前で射殺した事件が起きた。町民は情報が早く、「フエンゴライ翻過來々（革命）」と叫び始めた。私も居留民会に六人の満系がピストルを手にし、「ハロハ路、ハロハ路」と叫び走って入室してきた。とにかく私どもはホールドアップしていたら立ち去った。二日後北安からソ連軍が通北に再びきたから反政府行動は終わった。それが原因で県政府は通北から南方三つ目の駅、通康に移転、駅前実験場の小西・武井両君の台車で孫垂民の荷物を運搬

し、元の県公署は新しく供給部となった。供給部の内容はよく分からなかったが、まず男子の技術者（主として大工・本式の大工のほか、素人大工まで）が雇われた。宿舎、食物などはるかに良好だったから、希望者が増えた。

西火犁ウライの丸山団長は、応召家族で子供のない婦人を張供給部長に秘書という上品な職名のもと同居させたから、居留民会の若者は訪問していろいろの物資を供給された。

丸山団長のウライ工作が効をそうして、丸山団長ほか多くの新潟県出身者は、北安供給部に仕事を見つけて生活するようになった。

駅前実験場の小西義太郎は、実験場の乳牛と共に北安に移動させられた。北安に乳製品工場を設立させられ、ここにも通北県から婦女子が雇用させられた。

私どもは昭和二十一年九月三日に開拓団を放棄して、通北駅前に集結した。

通北の供給部は孫呉に移転する計画から、供給部の大工たちはトラックで孫呉まで連れていかれて宿舎の

準備をしたという。それが中共軍の旗色が良くなったから、孫呉移動は中止となった。供給部に採用された人々は、昭和二十一年九月の通北県開拓民の総引揚げからはずされて、留用が続けられた。空いた五福堂小学校校舎に昭和二十二年の春から宿泊し、北安で働いていた供給部の人々が柳毛濠開拓団（奥地）で阿片栽培（四十町歩）に動員作業させられた。そして昭和二十五年に全員日本に帰還が許可され、奉天まで南下したが、その時に朝鮮戦争が始まり、日本への帰還が不可能になり、奉天に満州各地から集結したが、日本人組織は解体させられて、好きなどころに行けという命令だった。五福堂から丸山西火犁団長の斡旋で、供給部に行った応召家族たちはやむを得ず日本人男子を探して結婚し、主として鶴岡炭砒や撫順炭砒などに散ったという。そして昭和二十九年、ようやく帰国することができたようだ。

中共軍の旗色が悪くなったという政治状況など、通北に残っていた私どもには知る材料はなかったが、だんだん生活が苦しくなってきたからか、通北駅前

に残された元日系官吏らが、早く南下したいと動揺した。それで警察では、居留民会に日本人の考え方調査を命じた。

(イ) ハルビン南下希望者 元日系官吏、満拓出張所長、

学校教職員

(ロ) 北安希望 西火犁団長ほか団員、東火犁団長ほか団員

(ハ) 現地定着希望 堀団長、西火犁報国農場長、柳毛濠  
岐阜開拓団、鶏走曙木俣指導員

名簿ができたから、通北警察の謄写印刷をしていた居留民会の大原佐五郎と坂本は、駅前においての中共派遣将校暗殺事件を知った。通康の県政府より連絡があり、私と木俣副会長と県政府に出頭せよという伝達があった。

初めての汽車旅行、そして通康駅に降りてびっくりした。駅前から道路上に、小麦粉で作られた見たこともない食べ物はずらっと並べられて、売り人が大声で叫んでいた。

県政府に到着したら秘書長が出てきて「待っていた、41

よってきた」と今までにない丁重な言葉で話された。私は感謝の言葉を申しあげた。「私も開拓団では一部病死した人も多いが、大部分は餓死することもなく、丸々一年余り生活させていただき、私は代表して謝意、国際協定による日本人帰国許可、有り難く、早速各団に通告いたします」と、そうしたら秘書長は「希望すれば残留されてもよろしい。医療なども十分施すから心配なく残ってください」と申し添えられた。早速私は東火犁の人たちに伝達に行った。木俣さんは柳毛溝方面に連絡された。県南は県政府から直接伝達されたという。私が東火犁に行ったら、佐藤団長は病気で休んでいると言うので佐々木校長に話す。「堀団長さん、そのお話、まだまされるんじゃないですか?」「それは今回は国際的な話ですから大丈夫です」。

続いて県政府から張政治委員が五福堂にこられた。張委員は昭和二十年九月ごろ、五福堂にこられて「英文のゴルキー著書」を私に渡して、そのうちこの著書についてお前と討論してみようと言われたから、辞典頼りに一生懸命読んだが、それは実現しなかった。そ

の張委員は命令された。

「三十五歳以下の男子及び子供のない婦人はしばらく中共工作に奉仕してもらう。今日は全員の調査をする」そして一人一人きびしく調査された。

堀団長は、この地を国営農場にすることになっているから、その指導に残ってもよい。これは冗談でなかったから、付いてきた日系共産軍二人に、妻と友人の妻たちが陳情して許してもらい、帰国が許された。

「昭和二十一年九月三日正午まで、全員五福堂を出発すべし」という指令であった。

九月三日朝に死亡した団員の子供もあつたが、岩田豊稔さんの錦の法衣に、元小野指導員の分骨、岩田さんの妻の遺骨、私の三男坊の遺骨はか百余人の遺骨を法衣に包んで埋葬し、木の柱を立てて、昭和十二年六月十九日からの開拓は閉鎖した。

私は本部の大扉を閉めて、人生最大の情熱を注いだすべてに別れを告げました。

### 【執筆者の横顔】

昭和八年、東京大学農学部を卒業と同時に海外雄飛の希望に燃え、加藤寛治先生の主宰する、満州国奉天市北大宮の移民訓練所に入所、卒業と同時に昭和十年濱江省賓農芸訓練所長となり、中国人訓練生と寝食を共にし、中国人農林指導者の養成に尽力した。

昭和十二年拓務省囑託、北安省五福の移民開拓団長となる。

昭和十六年、日本国紀元二六〇〇年祭に、満州国開拓団代表として参加した。

昭和十七年四月街村制度施行により村長となり、組合長と兼務した。

昭和二十年八月十六日敗戦宣告をうけ、中共政府北安省通北県日本人居留民協会長となり、通北県政府下、日本人約七千人の生活維持に当たる。

昭和二十一年九月開拓団を中共政府に返還し、日本に引揚げ、博多港に上陸した。

昭和二十一年十月末、出身地の山形県の生家に落着く。

昭和二十二年四月、岩手県庁開拓課に勤務。

昭和二十三年岩手県開拓連盟事業部長となり、アメリカ合衆国農業視察のため二カ月間出張を命ぜられる。

昭和三十年岩手県農業協同組合中央会営農部長に就任し、農業近代化を推進し、今日の大形営農経営の基礎を築いた。

退職後、盛岡市繁温泉郷御所ダム建設相談役となり、地権者の保証問題などの相談を受け、苦難の末、御所ダムの建設を完成させた。

岩手県拓友協会を設立し会長となり、満州開拓殉難者慰霊塔を雫石町網張の県開拓記念公園に建設し、その慰霊祭を毎年八月の第四日曜日と定め、全国より参加者五百余人余が集まり、慰霊塔前において開催している。

堀氏の経歴が物語るように開拓精神旺盛で、八十六歳半ばを過ぎた今も満州開拓のことは、忘れることはできないと活躍しておられます。

(引揚者団体岩手県連合会)

理事長 沼田 勇一